

# Referential properties of noun phrases and a grammar of copular sentences in English

著者	西田 光一
内容記述	Thesis (Ph. D. in Linguistics)--University of Tsukuba, (A), no. 2224, 2000.3.24
発行年	2000
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/2496">http://hdl.handle.net/2241/2496</a>

氏 名 (本 籍)	にし だ こう いち 西 田 光 一 (東 京 都)
学 位 の 種 類	博 士 (言 語 学)
学 位 記 番 号	博 甲 第 2224 号
学位授与年月日	平成 12 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	文芸・言語研究科
学 位 論 文 題 目	REFERENTIAL PROPERTIES OF NOUN PHRASES AND A GRAMMAR OF COPULAR SENTENCES IN ENGLISH (英語における名詞句の指示的特質とコピュラ文の文法)
主 査	筑波大学教授 P h . D . 中 右 賓
副 査	筑波大学教授 文学博士 藤 原 保 明
副 査	筑波大学教授 博士 (言語学) 鷲 尾 龍 一
副 査	筑波大学教授 文学博士 古 川 直 世
副 査	筑波大学助教授 文学博士 廣 瀬 幸 生

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、英語のコピュラ文, there 存在文をはじめとする多様な構文の分析を通して定・不定名詞句の指示性をめぐる一般的性質の解明を目的とした実証的研究である。

本論文の構成は、序章を含め全 10 章からなる。序章では、以下で扱われる課題が次のように措定される。①定名詞句と不定名詞句の指示的・非指示的特質の解明、②二つの be 動詞構文、すなわちコピュラ文と there 構文の平行性の論証、③冠詞 a/the と be 動詞の 3 語間の相互関係の確定、④③の結論に基づく多様な異種構文間の継承関係の証明である。

第 2 章では、不定名詞句の諸用法を特定性・非特定性の違いに基づいて概観する。とくに叙述名詞句の非特定のかつ非指示的な用法に焦点をあてる。

第 3 章では、個体指示に還元できない定名詞句、つまり非指示的用法の定名詞句の諸用法に焦点をあてる。この種の代表例に、①変項名詞句や総称名詞句の類、および②潜在感嘆文や強調的な最上級の類がある。たとえば、次にイタリック体で示す名詞句が問題となる。

(1) I can't remember *the kind of pizza she likes*.

(2) *The beaver* is increasing in numbers.

(3) It's amazing *the things children say*.

(4) He can stand *the loudest noise*.

ここで①の類 (1-2) ではく唯一性と複数概念との結びつきが、また②の類 (3-4) ではく唯一性と程度概念との結びつきが、それぞれの定名詞句の特徴的な解釈に関与することが明らかにされる。さらにまた、定名詞句の諸用法間の比較を可能にする共通概念として「範囲 (Range) に基づく唯一性」という概念が提案される。この観点から言い直せば、①の場合はく複数個で構成される範囲の唯一性」と解釈されるのに対し、②の場合はく程度的な属性の範囲の唯一性」と解釈される。かくして、①の唯一性を kind Uniqueness、②の唯一性を Scale Uniqueness と呼んで区別される。

第 4 章では、コピュラ文を分類し、be 動詞の意味をく叙述」とく同定」の 2 種類に定義し分けることが提案さ

れる。John is a gentleman. のような叙述文では、叙述的用法の be と属性記述的用法の a を含む不定名詞句が結びつき、主語名詞句の指示対象について、その属性が記述されている。一方、The guest was John. のような指定文では、「客 x は（だれだったかという）ジョンだ」という意味で、the guest は wh- 疑問文に等価な変項名詞句であり、その値が同定的用法の be によって指定されると説明される。

第5章では、叙述的用法のコピュラ文では、主語と叙述名詞句との間に数の一致が起こる場合と起こらない場合があり（たとえば They are teachers/a nuisance.）、それを議論の中心に据え、叙述名詞句に伴う不定冠詞の役割と単複の対立について考察する。とりわけ、叙述名詞句の単数性は、特定の指示対象の数に由来するものではなく、抽象的な属性の均一性に由来するものである。この抽象的な属性表現としての性質は、A whale is a mammal. における a whale のような総称的用法の不定単数名詞句に引き継がれている。

第5章では叙述名詞句に伴う不定冠詞について論じたが、第6章では叙述名詞句の主要部をなす名詞についてその特質が究明される。わけでも、He is a doctor. はクラス記述文であるのに対し、He is a fool. はクオリティ記述文であるとする経緯が明らかにされる。

第7章では、第4章で提案されたコピュラ文の分析が、2種類の there 構文、すなわち、所在文（There's a book on the table.）とリスト文（There's the book on the table.）にも、平行的に適用できることが示される。すなわち、所在文では叙述的用法の be と特定の用法の a が両立し、叙述用法のコピュラ文と平行的に、ある場所についてその特徴が記述される。一方、リスト文では同定的用法の be と指示的用法の the が両立し、指定用法のコピュラ文と平行的に、ある指示対象の存在を挙げて、前提となる wh- 疑問文の変項に対する値としてそれを同定する働きがある。

第8章では、名詞句の述語としての適用範囲という観点から、数量詞の a lot of と lots of の使い分け、what 型感嘆文の不定名詞句、that angel of an actress のような叙述関係を内在化させた複合名詞句など、名詞句の単複の違いによって容認度や解釈に違いが生じてくる事例を分析する。その結果、同じ不定名詞句でも、a を伴う単数形は複数形に比べ、叙述の対象となる範囲が広い、つまり、述語としての度合いが高いと主張される。第6章での結論をも考え合わせると、名詞句のなかで最も述語的性質が高いのは、①不定冠詞を伴い、かつ②主要部が程度を備えたクオリティを表わす名詞から成るような不定単数名詞句である、と結論づけられる。

第9章では、第3章で論じた非指示的用法の定名詞句が、そもそも、非指示的な叙述名詞句から、その性質を引き継いでいることが論証される。その証拠は、叙述名詞句の関係詞節化現象から得られる。叙述名詞句は関係詞節化されると定名詞句になる。定名詞句になっても非指示的な性質は保持される。論点は次の対比によって例示される。

(5) May I inquire as to *the kind of doctor he is*?

(6) It's amazing *the fool that he turned out to be*.

(5) の定名詞句は、wh- 疑問文に等しい解釈を受ける。それゆえ Kind Uniqueness の例であることになる。一方、(6) の定名詞句は、wh- 感嘆文に等しい解釈を受ける。それゆえ Scale Uniqueness の例であることになる。かくして、非指示的用法の定名詞句は、非指示的な叙述名詞句（つまり定義上、不定名詞句）と平行的な二つの解釈を許すことが明らかとなる。前者は後者を引き継いでいるといえるゆえんである。

第10章では、これまでの章で得られた結論がまとめられている。ひとことでいえば、本論文は、コピュラ文の補語名詞句の性質が多様な統語環境に生じる定名詞句と不定名詞句の種々の用法に受け継がれてゆくことを具体例によって示したということになる。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文の最終目標は、英語の定・不定名詞句に含まれる指示的・非指示的性質の全容を構文的ひろがりのなか

で解明することに向けられているが、この目標を達成するために著者は、わけでも、①コピュラ文のbe動詞と補語名詞句の意味論的性質とその相関関係を突き詰めたうえで、②それらの特質がそのまま異種構文にまたがる定・不定名詞句の多様な用法に受け継がれていることを実証的に示している。

第1の課題については、数多くの先行研究があるが、著者は事実上すべての関連文献に目を通し、とるべき知見を取り込んだうえで、豊富な用例を最解釈しコピュラ文の全体像を構築することに成功している。第2の課題については、著者独自の問題意識から発した未開拓領域であるといってよく、定・不定名詞句をめぐる構文横断的な継承関係を豊富な事実観察に基づいて論証した点は十分に評価される。

ただ、惜しむらくは、説明用語の選択と概念内容の煮詰めかたが適切とはいえない場合が多少見受けられ、それが入り組んだ議論の展開と相まって、論文全体が必ずしも透明な論理によって貫かれているとはいえないきらいがある。これは英語表現力とも無縁ではなく、英語による緻密な論の展開の仕方にさらに習熟する努力が求められる。とはいえ、総じて本論文は、統一的な視点と事実観察の包括性において既存の個別研究を超える成果を収めており、意味・語用論的研究に新しい局面を切り開く業績として高く評価される。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。